

Stanford 大学海外研修に参加して

藤田保健衛生大学衛生学部
辻岡 勝美

1. 期待していた事とその結果

私が今回の海外研修に対して期待したことには「研究の方法」「教育の方法」について知見を得たいということであった。

第一に「研究の方法」であるが、私はこれまでに、ヘリカルスキャン、CT 透視、CT の自動露出機構、等の各種技術を開発してきたが、アメリカでは、これらのような新しい技術をどのような方法で開発しているかを知りたかったということである。「これまでの方法でよいのか」「よりよい方法はないか」ということである。これは、対象を CT に特定しなくてもよいことで、今回のセミナーでは fMRI の開発、Molecular Imaging の講義・実習でそれを垣間見ることができた。CT に関しては、私が以前から RSNA などで知っていた Dr.Rubin や Dr.Napel、Dr.Fischbein と CT 研究について親しく話す機会があったのも大きな収穫であった。

第二に「教育の方法」であるが、これは「研究の方法」についてよりも日本とアメリカの差が大きく、考えさせられるものが多くあった。今回、セミナーを開催していただいた Stanford 大学の Lucas center では、数名の指導教授の下にフェローが 20 数名、レジデントが 20 数名、大学院生が 20 数名であった。大学院生などには一定のスペースがあり、常時そこで研究を進めていた。これは、私が以前訪問した Johns Hopkins 大学や Chicago 大学、Colorado 大学と同じであった。ただし、今回のセミナーでは実際にそこにいる大学院生と日常での研究の進め方、将来のことなど詳しくインタビューできたことは成果であった。

2. 得られた成果とそれをどう生かすか

今回の研修で知ることができた「研究の方法」「教育の方法」は私に大きな刺激を与えてくれた。ただし、「明日から Stanford のようにやっていこう」と言っても、それは無理。逆に、我々の研究方法のよいところもわかったような気がしてきた。今回、Lucas Center という 1 つの研究施設しか見学することができなく、Engineering 的な研究施設ではなかったが、私の研究室では大学院生や教員が「思いついたらすぐ提案」「思いついたらすぐ実験」を実践できるようにしている。システム構成や人員配置では、「さすが Stanford 大学！」という面を見せ付けられたが、「内容では負けてないぞ！」という気持ちも少しあった。今後は、我々の研究室のよい面を維持しつつ、今回の研修で得たことを加えて、「よりよい研究室作り」をしたいと思っている。

3. 最も印象に残ったこと(セミナーとイベント)

今回の研修で印象に残ったことは多くあるが、その中でも fMRI の講義・実習をしていただいた Dr.Glover である。彼は GE の MRI 「Signa」の開発者であり、CT 専門の僕でも名前ぐらいは知っている有名な人である。その Dr.Glover が講演、そして、自らコンソールの前に座って fMRI の実際を説明されたことには大変感激した。その他の先生方も著名な方が多く、「日本人相手のセミナーなんか片手間」という人は一人もいなく、講義の内容には大変満足している。

その他のイベントでも、ライトコートでの昼食など、researcher や大学院生などと話をする機会があったのも大変よかった。

4. 今後の海外研修に期待すること

今回の海外は最先端の放射線科学を知ることができ大変有用であった。これは、現在の専門モダリティに関してではなく、「将来、放射線科学がどう進歩していくか」について考えるよい機会になったと思う。今後もこのような企画を続けていいってほしいと思う。

私見ではあるが、セミナーとして受身ではなく、日本技術学会として宿舎あるいはライトコートで講師の先生方を招いて会食・交流、というような企画があつてもよかつたのではと考えている。いかがでしょう。



写真解説: MRI の開発者 Dr.Glover が自らコンソールに向かって操作を説明してくれた。楽しそうに操作・説明するのが印象的であった。